その家はF県K市の郊外にあった。
閑静な住宅街の中にあって状態も悪くないのに、次々と持ち主が替わっている奇妙な家。
そこに住む者は、必ず幸運が訪れるという。

俺は大学中退後、当初は就職活動をしていたがこれという仕事も無く、諦めていわゆるニートとなり、親と暮らして生活していた。

そんな俺に両親共によい顔はせず、二人して度々就職しろと言ってきてはいたが、気に入らない仕事で心身すり減らす？　そんな馬鹿な事はしたくなかった。

こうしてだらだらと過ごしていたがある時、親が仕事の都合で別の土地に引っ越す事になった。

養って貰っている身としては当然、一緒について行かざるを得ない。まあ、特に今いる家に思い入れがあるわけで無し、諸々の荷物を片付けたり、手続きするそんな煩わしさがあっただけで、それも大体親がやって俺は大して苦労は無かった。

しばらく後、業者が荷物を運び終わり、俺は新たに住むことになる家をその日初めて見たのだが……妙な違和感を感じた。

一見特筆すべき特長も何も無い、ありふれた一戸建てなのだが……まるで透明な布に家全体が覆われ、その下の本当の姿が見えていないかのような、そんな変な感じがした。

一緒にいた両親にこの家何かおかしくない？　と問いかけてみたが、二人とも怪訝な顔をして、普段からの冷ややかな視線を俺に浴びせて来ただけであった。

まあ、当然の反応である。自分でも何故そう感じたのかわからないし。

家の中に入るとやはりよくある間取りで、一階は居間、台所、和室とあり後は風呂とトイレと階下収納、二階に上がると三部屋の寝室と物置があった。

そこそこの築年数が経っていると聞いたのだが、新築特有のあの木材や化学物質の匂いが漂って来そうな程、家の中は綺麗な状態だった。

両親は中古物件なのにこれは掘り出し物だと喜んで購入したようだが、俺はいくらなんでもありえないと、内心の違和感が大きくなっていた。

しかしそんな俺の懸念もよそに、特に何かが起きる訳でも無く、俺のニートライフは相変わらずだらだらと平穏に過ぎていった。

……両親の俺を見る目がどんどん厳しくなっているのを除けばだが。

そんな感じでいつもの様に共働きの両親が家を出て、俺はその後二階の寝室から一人遅くむっくりと起きて朝食とも昼食ともつかない食事を摂ろうと、一階に降り居間のドアを開けると……

居間の真ん中に見知らぬ少女が立ち、こちらを見ていた。

「……っ！」

俺は息を飲み、不審者か！？　と頭はパニックを起こしつつも、彼女をよく見てみる。

身長は恐らく中肉中背の俺の胸辺りくらいまでの、大分小柄な寸胴体型。

その髪は染めているのか少し傷んでいるような金髪で、その根元の方は黒髪が見えている。肌は日焼けした様な小麦色であり、いささかくすみがあった。

そして何よりその目。不自然な程、色鮮やかな翡翠色だった。

……いわゆるギャルというやつか……？　俺は最近テレビなどで観る、自分とは全く縁の無い人種の女子らの事を思い浮かべる。

彼女の容姿は決して不細工とかそういうのでは無く、むしろ可愛い部類に入ると思ったが、彼女のその服装、薄汚れた黒いダボダボの男物のTシャツ、そこにスクリーントーンで印刷したのだろうか？　鮮血の様な色でデカデカと荒々しく、飛び散ったかのような文体で〈TANU KILL〉と書かれた、意味不明の文字が目に入る。

それがあまりにもダサく、彼女の魅力を減じていた。

「な、なんだ、君……？　家で何しているんだ……？」

「……ふーん……お兄さん、あたしのことわかるんだ」

突然の事に動揺してその場で固まっているしている俺をよそに、彼女は極めて軽そうな口調で呟き、そして俺を改めて見上げ、その翡翠色の目をこちらに向けながら答える。

「あたしは座敷わらしだよ」

「ざしき、わらし……？」

確か……家にいると幸運を呼ぶとかいうやつだったか？

――この世に、そんなものが本当にいるとでも……？

俺は昨今の心霊ブームでよく放送されているテレビ番組の内容を全く信じず、冷めた目で観ている方なので、彼女の言葉にかなりの疑いを感じていた。

「じゃ、お兄さん、さっそく交尾しよっ！」

「……はぁ？」

何を言っているんだ、この子は……？　やはり頭のおかしい不審者、いや痴女なのではないか……？

「あたしの事わかる人、久しぶりだからねー。そんなんでここしばらくはそっちの方全然なんだよねぇ」

――いやいやいや……常識的に考えて、こんな状況で得体のしれない子といきなりヤるなんてあり得ないだろ。

決してビビっているわけではない。断じて。

「……ばあっ！」

「い……っ！？」

彼女は俺の目の前で突然自らのシャツの裾を掴み、腹まで捲りあげた。

その下は何も着けてはおらず、彼女の鼠径部が露になり、その間の可愛らしい女性器が丸見えとなる。

「……!?」

それを見た俺は激しく動揺し、思わず彼女の前で四つん這いになると、その格好のままパクパクと空気を求めるように口を上下させ、唖然とした表情で食い入るようにその割れ目を凝視してしまう。

「あ、その反応、お兄さん童貞さんだね？　こーんな小さな体でも興奮するんだ？　……もしかして、そういう趣味？」

彼女の言う通り、俺のペニスは初めて見るメスの性器に我知らずギンギンに勃起していた。

「むふふ～……じゃあほら、服を脱いで横になりなよ。あたしが初めて貰ってあげる」

「え、いや、そんな――」

あまりの展開についてゆけず、俺は顔を女性器から目を離し、彼女の顔を見上げた。

見下ろす彼女のその翡翠色に輝く瞳を見つめた瞬間、俺は急に頭の後ろからガツンと殴られたかのように意識が朦朧とし始め、何も考えられなくなる。

「あ、あー……」

そしてそのまま、俺は彼女に言われるがままその場で服を脱ぎ、床に横たわり仰向けになった。

「そうそう。いいこ、いいこだねぇ☆彡」

彼女はそう言いながらニヤニヤと笑って俺の上に跨がり、ギンギンに勃起しているペニスを自らの女性器にあてがい、そのままゆっくりと腰を落とす。

ぬぷぷ……

意外な事に彼女の膣内はその小柄な体つきに似合わず、あっさりと俺のペニスを根元まで飲み込んだ。

「ふっふっふっ……こんな簡単に挿入って驚いた？　こう見えてもあたしは結構経験豊富なのだ」

「ぐ、ぐぅぅっ！」

彼女が頭が空っぽのような軽い口調で話すのをよそに、俺は初体験のあまりの気持ちよさに頭を反らして舌を突きだし、両腕を体の前に向け、それぞれの拳を固く握り耐える。

その温かさ、心地良さは今まで経験してきたどんなものより比較にならず、俺の脳は速やかにこの快楽に依存し、変質していっているのを感じる。

こんな凄いのを知ってしまったら、もう逃れられるわけが無い。

カクッ！　ヘコヘコ……

「ふぐっ！　あ！　あ！　もう駄目！」

無意識の内にほんの数回腰を下からカクつかせただけで、俺は精子をこのメスの子宮に送り出そうと発射寸前であった。

俺のそんな様子を見て彼女は口角を上げる。

「……ん？　あれ、もしかしてもう射精る？　……えーお兄さんはやーい。まあ、童貞さんならこんなものかー」

彼女はその目を宝石の様に煌めかせ、顔を俺に近づけじっと見つめながら囁いた。

「ほら、あたしの中に童貞精子びゅーーーって射精していいよ」

その刹那。

ペニスから大量の精液が放出された。

どっっびゅーーーーーっ！　ぶびゅびゅーーーーっ！

「あーーーっ！　あーーーっ！」

俺は初めての膣内射精に彼女の下で情けなく叫びながら、彼女の腰をしっかりと両手で力いっぱいに掴み、自らのペニスを全力で子宮に届かせようと突き出して幾億もの精子を注ぎ込む。

びゅぐぐっ！　びゅびゅっ！　びゅー……びゅー……

「あっ！　あっ……！　お、おー……」

彼女が静かにこちらの顔をじっ……と見つめている中、俺はペニスの脈動（みゃくどう）が止まるまで腰を押し付け、やがて精液を出し切ると、ドッと全身が脱力して両手を彼女から離し、大の字で床に横たわり、荒い息を吐いて余韻（よいん）に浸（ひた）る。

――これまでの人生で一番の快感だった。

俺は大満足な気分で彼女からペニスを引き抜こうとした。

すると。

ぎゅっ！　ぎゅぎゅぅぅぅっ！

「うひぃっ！」

射精したばかりの敏感なペニスを、彼女の膣内はまるで俺自身を飲み込もうとするかのように締まり、吸引してきた。

「うんー？　お兄さん、もしかしてもう終わろうとしてる？　駄目だぞ☆ミ　若いのにそんな淡白じゃ」

パンッ！　パンッ！　パンッ！

「ひっ、ひぃぃっ！」

彼女は俺の都合などお構いなしに、完全に自分のペースで再び腰を激しく振り始める。
「だ、だめぇ！　まだイッたばかりで敏感なのぉ！」
「ほらっ！　ほらっ！　ほらっ！　もっとおちんちんバッキバキにして精子出せ！」
俺の話など一切聞かず、彼女は更に腰振りを加速させ、膣内は金玉の中の全ての精子を一匹残らず搾り取るかのような激しい収縮でペニスを締め上げる。
その快感に出したばかりのペニスは、俺の意思を無視してまるで興奮剤を投与されたかのようにビキビキと海綿体に血が結集し、再び最高の気持ち良さを得ようとありったけの精子を集結させ射精しようというのがわかる。
「お、また射精しそ？」
彼女は俺の表情から再射精の兆候を感じ取ったらしく、上半身を俺の体の方へと再び傾け、脚を曲げてまるで杭打機の様に腰を激しく打ち付けながら、その翡翠の瞳を真っ直ぐに俺の目と合わせる。
まるでその輝きが光線となって自らの中に入ってくる錯覚を覚え、俺は更に思考が混濁し、ただただ心地良さだけを感じる。
――そして、一際力強く腰を落としペニスを膣の奥深く密着させると、彼女は呟いた。
「だせ」

――――どびゅびゅびゅーーーーっ！　びゅぶぶーーーっ！

その言葉を合図に、まるで鉄砲水のように物凄い勢いで俺のペニスから大量の精液が放出される。

「びぎぎぃぃぃっ！　だべぇ！　しんじゃう！　たすけて！　たずげでぇ！」

二回目にも関わらずその異常とも言える射精の量に比例し、快感の強さと持続時間がいや増し、俺は頭を激しく左右に振ながら手足を激しくバタつかせ、その体は弓なりにビィィィンッ！　と腰を突き出し、ペニスは精子を彼女の更に奥深くまで届かせるようにビクビクと震える。

びゅびゅびゅーーっ！　びゅぐっ！　びゅぐぐっ！　びゅっ、びゅっ……

「あえ……あへぇ……ひゅー……ひゅー……」

まるで精巣にある全ての精子が吸い出されたかのような感覚と、その快感の後に襲いかかる激烈な疲労によって、俺は深く暗い静かな水の中に落ちるように、そのまま意識を失った。

「……ん、あれ？　おーい、お兄さーん？　聞こえてるー？」
男の精子をことごとく搾り取った後、ソレはそのままの体勢で男に向かって呼び掛ける。
完全に気絶している事を確認すると、ソレは呆れたように嘆息し、一人呟く。
「――**たった二度吸い上げただけでこれか……こいつ弱いな**」
その声は、まるで厚手の布を被っているかのように、くぐもっていた。